新飯田地区

～船着き場に栄えた商人のまち～

ガイド紹介 有願会（うがん）まちあるき係

「有願会まちあるき係」は、江戸時代に新飯田の円通庵に住み、良寛和尚とも親交の深かった禅僧 有願和尚を研究する「有願会」を母体とするまち歩きガイド団体だ。毎回変わった視点でコースを組み立て、何度参加しても飽きないまち歩きを体験できる。時間と要望により、依頼者だけのオリジナルのまち歩きも案内する。

有願会まちあるき係　山田泰介さん

昔の資料から今との違いを発見し、歩いて行けるところをみんなで話し合いながら回っています。普段はなかなかできない「食べ歩き」も体験できます。楽しく一緒に新飯田のまちを歩いて、地域を元気にしませんか。

【ガイド申し込み先】
有願会まちあるき係　電話：090-2646-3385
（ご希望の一週間前までにお申し込みください。）

新飯田橋トリビア

太平橋、開運橋、そして現在の新飯田橋と、代々橋の名前が変わっている。
ちなみに、現新飯田橋は昭和11年11月11日に開通橋祭が挙行され、現存する主要道に架かる橋の中では萬代橋（昭和4年竣工）に次いで古い。

新飯田神明宮と金刀比羅宮・住吉宮

新飯田神明宮の境内には、航海の神様を祭る神社である金刀比羅宮と住吉宮が合祀されている。かつて新飯田地区が川港として栄えていた頃、これらの神社が舟運に携わる人々の信仰の中心であったことがうかがえる。

食べ歩きグルメ

まち歩きに欠かすことができない食べ歩きグルメ。ガイドおすすめの逸品をご紹介。

1 山田七蔵茶舗の自家焙煎 ほうじ茶ソフトクリーム

江戸末期より続く老舗。かつては堤外地に茶畑もあり、製造販売も手がけていた。自家焙煎のほうじ茶で他にない味のソフトを販売している。

2 大野精肉店の揚げたてハムカツ

新飯田で最初の精肉店が販売するハムカツは、価格が5円の時代から変わらぬ味が自慢の逸品。まち歩きのお供にどうぞ。

3 昔ながらの味噌製造 糀屋団四郎の和釜

新飯田地区で昭和初期から四代にわたって続く味噌蔵。大豆を蒸すのではなく、和釜を使って煮て一昼夜置くという伝統的な製法にこだわり、旨味たっぷりの味噌を手間暇かけて作っている。使用する大豆は北海道産と新潟県産、米は蔵の前に広がる田んぼからとれたコシヒカリを使用するなど、国産原材料にもこだわる。

4 円通庵（田面庵）と有願和尚（海翁東岫）

円通庵は寛保2（1742）年に創建された曹洞宗の寺院で、良寛詩集の中では田面庵と呼ばれる。三代目庵主として有願和尚が従事していた頃、道友の良寛和尚が度々ここを訪れたといわれている。現在の建物は江戸末期の文久元（1861）年に建てられた。

元文2（1737）年、現三条市代官島の田沢家に生まれた有願和尚は、幼少期を南区茨曽根の永安寺 古岸大舟和尚に学び、後仁箇村（旧巻町）の萬福寺 悦巖素忻和尚の法脈を継いだ。諸国修行の後、晩年は南区新飯田の円通庵三世となり、村の子どもたちに手習いを教えるなど教育を施し、社会奉仕にも心掛けた。書はもとより絵画にも優れており、詩歌も巧みであった。また、越後に帰国後の五合庵に住んでいた良寛和尚とよく交流を重ね、互いに影響しあった。

伝・有願（うがん）自画像

円通庵の境内には、文化5（1808）年8月3日に亡くなった有願和尚の墓が建っている。また、同列には有願和尚の師匠であり、良寛和尚の手習いの師匠 大森子陽も学ばれた古岸大舟和尚の墓も並んで建っている。
新飯田商店街から円通庵へ至る庵小路には、有願和尚が敷設に7年もの歳月を費やし、越前石の踏み石を敷いたと伝えられている。毎年お盆過ぎの日曜日には、有願和尚をしのんで100基以上の灯ろうが小路に並べられる。

新飯田まつりと小川連中

毎年6月中旬の金・土曜に開催される新飯田まつり（神明宮祭礼）。祭りの見どころは、神明宮への神輿渡御に先立って、道中の悪魔祓いとして神楽舞や手踊りを行う小川連中だ。小川連中の歴史は古く、三条は鶴田の生まれ、渋谷藤右エ門が江戸時代後期に舞踊を伝えたといわれる。現在では、神明宮の裏手にある「小川連会館」において、それらの郷土芸能の伝承が行われている。演目は岩戸舞をはじめ刀踊り、おかめ踊り、きつね踊り等々、極めつけの天狗舞は圧巻である。祭りのラストを締めくくる勇壮な神輿舞い込みも見逃すことはできない。

"新飯田の渡し" 場跡

周囲を川に囲まれている白根郷では、古くから渡し船が重要な交通手段であり、新飯田にも橋の下流約100m地点に渡し場があった。昭和11年まで渡し守をしていた「谷八ろん」の自宅跡も残る。

"島がしら"だった新飯田

新飯田地区の南側にはかつて、中ノ口川から分流して信濃川（三条市井戸場）と合流する福田川と呼ばれる約2kmの川が流れていた。福田川は、かつては現中ノ口川とあわせて信濃川の本流であったが、信濃川の河川改修に伴って徐々に流量が減少し、文政11（1828）年の三条地震による隆起で消滅した。現在では川跡は果樹栽培地帯となり民有地であるが、堤防は今でも国の管轄地のままである。

※地図は実際の縮尺とは異なる場合があります。